

研究ノート

中世における京都町衆研究の課題

齋藤 宣裕

◎発表の概要

町衆とは、林屋辰三郎氏によると「南北朝の内乱、応仁の乱を経て都市生活の前面に進出し来った「町」に據って、地域的な集団生活をいとなむ人々」^①のことである。応仁の乱の後に続いていた戦乱や各地で蜂起していた土一揆、あるいは一向一揆に対抗するため、日蓮宗徒を中心とした町衆たちは自衛のために法華一揆という武力を持った組織を構成するようになる。天文元年から始まった戦闘において法華一揆は一向一揆の本拠地であった山科本願寺を攻め落とし、その後も勢力の衰えぬ一向一揆の集団から京都の町を守り続けた。有力な町衆信徒を中心として年貢や地子銭の免除・半済、また検断権を獲得して自治を強めていったが、それは幕府や荘園領主にとって深刻な問題であり、京都における日蓮教団の発展を嫌う比叡山にとっては宗教的対立という観点からも脅威であったと考えられる。ここにおいて、天文五年に松本問答をきっかけとして天文法難が起こり、結果として京都の法華宗教団は壊滅的な打撃を受けることとなるのである。

筆者が修士論文の題材として京都町衆の研究を取り上げてから十余年が経ち、新しい論文・著作が見られるように

なった。それらを基に町衆の研究について再検討を行なったところ、いくつか今後の研究課題が浮かび上がった。本発表では、新しい研究成果や当時は深く取り上げなかった文献等を参考にしながら課題を整理して、今後の研究に繋げていきたい。

一、『言継卿記』について

鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて発達した商業区域で生活する人々は「町」を形成し、自治を高めつつあった。そこに暮らす商・手工業者たちのことを当時の公家、貴族たちが町衆と呼んだことが、日記等の史料などに見られる。その後時代を経て、町衆は土倉衆や没落貴族をも吸収して地域的集団生活を形成するようになった。^②

当時の町衆の生活や京都を取り巻く情勢について、『言継卿記』^{（しごつぐんやうき）}という史料がある。今谷明氏はこの日記について

『言継卿記』は、参議を経て正二位権大納言となった戦国時代の公卿・山科言継が大永七年（一五二七）から天正四年（一五七六）にかけて書き綴った日記である。その内容は皇室御領や有職故実^{（ゆうしやくこじつ）}、さらに医薬・音楽・文学・芸能、そして京都町衆や武士などによる京畿の政治動向、社会的事件まで広範にわたっている。

（中略）

史学の初心者にも読みやすい親しみの持てる内容を、平易でわかりやすい極端に和風化された文体で綴ったこの日記の特徴のひとつは、貧乏公卿としておよそ公卿らしくない生涯を送った記録者の処世の面白さにある。しかし、それにもまして重要なのは、見聞を克明に綴った時代の記録としての史料的价值である。^③

と述べている。

当時、山科家は応仁の乱を経て莊園としての領地がほぼ解体されるといふ事態に直面し、供御人くごにんから徴する公事錢くじせせんや関所からの不安定な収入を得るのみという貧窮の状態にあった。

天文元年（一五三二）六月には『言繼卿記』に

予の蚊帳質物これあり。今日四十疋よそにて取り出す。比興々々。

という記述が見られる。これは生活苦のため質入れしていた蚊帳を買い戻したという内容であり、当時の逼迫した経済状況がうかがえる。

そのような生活苦をしのぐため、言繼は医薬による副業を行なっていた。副業とはいえ彼の医療は本格的なものであり、当時の右大臣を始め女官や僧侶に至るまで診察を受けている。^④言繼は多数の地下庶民の診療を行なっていることが特徴的であり、それにより地域住民との交流はかなり幅広いものがあつた。^⑤そのことにより、町衆との接点が生まれたともいえる。

大永七年（一五二七）足利義維よしのび・細川晴元らの堺公方府は洛中支配に乗り出したものの、足利義晴・細川高国らが京都に入ったことにより堺公方軍と京の町衆・公家との間で種々のトラブルが生じた。その後も度重なる堺公方軍の乱入に対して、町衆たちは結束を固めて町を守つたのである。そのような時に、防衛のための「かこい」を作るために山科家の竹が大いに役に立ったという。『言繼卿記』大永七年十二月一日条には、言繼のところへ竹を十本所望してきた町衆に対して働いた者に酒を飲ませて労っていることが書かれている。^⑥

しかしその後、町衆たちが法華一揆として自治の力を増し軍事・刑事警察権をも持つようになると、その勢力は公家たちをも脅かす存在へと変わっていく。天文二年（一五三三）十二月には洛西の村を一向一揆の巢窟とにらんで焼

き打ちするという事件が起こり、言継も『言継卿記』同年十二月二十五日条で「言語道断の事なり」と非難している。^⑦法華一揆勢力はその後には洛外農村の代官請（徴税請負）を領主に要請するようになり、さらには地子銭の不沙汰、あるいは年貢の減免である半済の事例が頻発するようになった。

すなわち当初は「町」という同じ地域に生活する者として、協力的ともいえる立場であった公家たちも、町の防衛という本来の目的を超えた力を持ち、従来の社会の仕組みを変えて公家勢力の収入構造にも干渉するようになってきた法華一揆に対して不満、あるいは恐怖の思いを抱くようになったと推測される。法華一揆は天文五年（一五三六）に松本問答を契機として起こる天文法難により鎮圧されることになるが、そこに至る要因のひとつとして、こうした公家・荘園領主たち旧勢力の危機感もあったのではないだろうか。

二、法華一揆の歴史的意義

法華一揆の果たした役割、歴史的意義について、筆者は以前の研究発表^⑧において次のように述べた。

当時の京都は近郊郷村などからの乱入、略奪の危機に加え、一向一揆の脅威にもさらされていた。幕府の警察機構の弱体化もともない、京都住民の自衛の必要性は明らかであった。そこにおいて必然的に構成されていた法華一揆という組織が、共通の敵を持つていた細川晴元政権によって利用されていったと考えるのが妥当であろう。しかし、細川政権によって利用されていたとしても、京都の町の自衛という点においては法華一揆成立の目的は果たされていた。また、各地での戦闘によって力をつけた法華一揆の軍事力は、その自治の力を成長させるために大いに役立ったのではないだろうか。

つまり以上のことから推測するに、京都における町衆は土倉・酒屋などの経済的な力によって成長を遂げ、法

華宗の信仰によってその団結を強め、さらには法華一揆という軍事力によって京都の町の自治的な成長を大いに促したと言えるのではないだろうか。

天文法難の後には織田信長の入洛によって京都の町は次第に新しい封建的専制支配のうちに組み込まれてしまいが、旧勢力の支配から自らの力で自立・自治の動きを生み出した点において、法華一揆は歴史上注目するべき事柄であったと思われる。

法華一揆の形成という事実が、京都町衆の手によって自治を進める契機となったのか、という点については先行研究においても度々議論されてきた。これには、生活共同体である「町」がさらに集まって組織される自治組織である「町組」^{ちやうぐみ}の成立の問題も関わってくる。つまり、法華一揆の存在は「町」の発展的組織ともいえる「町組」成立を促したのか、ということである。

今谷明氏は町組結成を推測する手掛かりは現在のところ残されていない、としながらも「『年頭御拝礼参府濫觴之扣』^{ひかえ}の伝承をも参考にして、天文初年まで引き上げられるのではないかと憶測している」と述べている。また今谷氏は「町衆の自衛的集団行動が法華一揆の末端組織Ⅱ町組の原型へと編成され（中略）町組は町衆の自治的共同体としての一面と、権力による行政の末端組織としての両面を持つ存在であった」と推測している。^⑩

これに対して、西尾和美氏は「京都において町組がいつ成立したか詳細に明らかにできない以上、法華一揆との関わりを時期的に論じることとはできない」という前提のもとで、法華一揆と町組成立との関わりについて地域的な比較検討を行なっている。それによると当時の洛中法華寺院はすべて町組の地域的広がりとははずれた位置にあるとし、「地域的結合を背景として成立する町組の原型をその末端組織として戦われるような基本的構造を以て法華一揆が戦われたとする理解には直ちにつながらないと考えられる」と結論づけている。^⑪

また、河内将芳氏は法華一揆と町とを異質な存在としてとらえ、その理由を法華一揆がおもに信仰や宗教の結びつきによって成り立っていたのに対して、町はおもに地縁によって成り立っていたからである、と述べている。^⑮つまり、この時期の京都には異なる原理によって結びついた集団が、人々の中に併存していたと考えているのである。

この問題について当初の研究では、町衆と法華一揆を同一の存在とみなし、その武力及び勢力が増大するにしたがって町の自治を獲得し、やがて法華一揆は細川政権に利用され壊滅に至るが、町から町組へと京都の自治を進めたという点に法華一揆の意義が認められる、とされてきた。しかし、近年の研究では町衆と法華一揆とは完全に同一の存在ではないとされ、さらに法華一揆の存在がどれほど京都の町の自治に影響を与えたのかという点についても疑問視する研究が見られるようになってきたのである。

町組の成立年に関する史料が乏しく、この点に関して現状結論を出すには尚早であるが、筆者は今谷氏の推測に賛同する。

周知の通り当時の法華宗は京都において、応仁の乱後の文明十三年（一四八一）には「法華宗の繁昌は耳目を驚かすものなり」といわれ、畿内法華一揆がその隆盛を極めたとされる天文元年（一五三二）になると後に「京中大方題目の巷なり」とまで言われたほどに隆盛を誇っていた。そのような状況の中で法華信仰という共通点を持っていたであろう、町衆を中心とした法華一揆と地縁的に発達を遂げた町の組織とが、いかに地理的に離れていたとしても、まったく異質な存在として併存していたとは考えにくいと推測する。法華一揆と町の組織とは少なからぬ関連を持って併存していたのではないだろうか。

また、応仁の乱後に土一揆などの乱入に対抗するために、被害者である土倉は傭兵によって防衛を行うようになり、町々にはそれぞれ警固の者を配置していた。^⑯その後には町衆たちが自衛のために法華一揆という武力を持った組織を作ることになる。京都周辺では敵対していた山門勢力も目を光らせていたという厳しい状況の中で、洛内にとどまら

ず洛外からも武器を持った人々が集まり、当地が極度の緊張状態にあったことは想像に難くない。それにより当事者であった法華一揆勢力と、地縁によって結ばれた町との間には自治防衛という観点から何らかの接点があったと考えられるのは自然なことのようにも思われる。その点において法華一揆と地縁組織たる町との間に関係性が認められるのではないかと推測する。

いずれにしても町組織成立の問題と、法華一揆と町との関係の問題は、法華一揆の果たした役割、歴史的意義を考察する重要な手掛かりとなると考える。

今谷氏は法華一揆について

このように、わが国史上に未曾有の市民による自発的武装化という注目すべき運動も、その初期には老獪な戦国大名権力に利用され、結果的には捨てられた形になったのも止むを得ない。しかし天文二年六月の大坂との講和以降、法華一揆が地子不払運動と洛中洛外の地下請を要求、展開したとき、この運動は権力の走狗たることをやめ、革命運動に転化したという見方もできる。(中略) 山門と六角氏の武力に苛烈な弾圧を食らった法華一揆の最後の姿こそ、この運動が早熟な革命運動であったことを何よりも示すものではないだろうか。¹⁷⁾

と、評価している。革命とまで評価をするべきかについては一考を要するが、法華宗の信徒が中心となり自発的に武器を取り、少なくとも数年間においては(京都の町の成長に対して、どれくらいの貢献度があったのか疑問があるにせよ)自治の動きを見せたということは歴史上、十分に注目すべき出来事であると考ええる。

三、今後の課題

今回、本稿において触れることができなかった今後の課題として、次の点がある。

一つには法華一揆の構成員についての問題である。この問題について、以前の研究発表において筆者は

法華一揆の構成員は法華宗信徒を中心とし、それに加えて信徒・未信徒混在の京都町衆、さらには細川政権からの報酬が目的であった野武士や地侍などが加わっていたと考えられる。そして法華一揆の隆盛とともに、その構成人数は増加していったものと推測されるのである。^⑧

と述べた。この問題に関して、冠賢一氏は

山門側の攻撃に対し動員された京都日蓮宗側の加担者も、京都諸本山を中心とする洛内の僧俗信徒だけではなかった。洛内諸本山の要請により、京都防衛に駆け付けた諸国の末寺僧侶信徒がいたのである。その意味で天文法難は、単に洛内の一事件にとどまらず、すぐれて全国的規模をもつ事件であったといえよう。具体的には、京都本国寺を本山と仰ぐ若狭国（福井県）の長源寺の一党、同じく本国寺を本山と仰ぐ下野国（栃木県）の妙金寺の一党、さらに京都本満寺を本山と仰ぐ摂津国（大阪府）高槻本澄寺一党の動向を見ることができるとして、山門側の厳しい警固のなか京都に駆け付けたのは、本国寺・本満寺の末寺僧俗信徒だけではなく、さらなる広がりをもつものではなかったか。^⑨

と、法華一揆への全国的規模での加担者の存在について指摘した上で、さらなる広がりを持っていた可能性にも言及している。法華一揆が京都周辺にとどまらず、もっと大きな規模での事件であったとすれば、先に述べた京都の町へ与えた影響もさらに大きなものであったことが予想される。この点についてはさらに検討を続けたい。

また、もう一つにはどのようにして「京中大題目の巷なり」といわれるほどに、当時の京都に法華宗が信仰されていたのかという問題がある。これはいわゆる「戦国仏教」の成立にも関わってくる問題である。

河内将芳氏は、当時の公家の中でも最上級の家柄であった近衛家が法華宗を尊崇し始め、近衛政家の日記である『後法興院記』²⁰に、政家の娘と思われる「奥御所」とよばれる女性が本満寺において題目を唱えながら臨終を迎えたという記述が登場することに着目している。²¹このことから、法華信仰による女人成仏の教義が女性の信仰に繋がった可能性を指摘するとともに、以前の顕密仏教・顕密寺院が決して関わることのなかった葬送に法華宗は積極的に関わったということに注目している。²²こういった要素こそが顕密仏教から鎌倉新仏教へと信仰の中心が変化していく契機のひとつではないか、とも推測される。

さらに湯浅治久氏は応仁の乱後の日蓮宗寺院の復興の背景に、有力な町衆たちの帰依があったことを述べ、

そこには富の追及の思想が確実に根付いていた。この時期の京の日蓮宗寺院は、金融業として祠堂銭の貸し出しを広く行っていたが、慶長十年（一六〇五）妙覚寺の日奥は、「来年から自分の持ち分の銀八目以外は、日蓮聖人へ進上せよ。（それをもとで）人に貸すならば一割の利子を取り聖人へ戻すように」（『万代亀鏡録』²³）と定めている。つまり当時は日蓮の名のもとに祠堂銭が集められ、金融に廻され、回収されていたのである。

と指摘している。さらに湯浅氏は

日蓮自身も、「金と申すもの国主も財とし、民も財とす。たとへば米のごとし、一切衆生のいのちなり。ぜに又かくのごとし」（『上野殿御返事』）と、金銭のもつ魅力をなかなば肯定しているが、室町期の京でそれが花を開いていたのである。²⁴

と、日蓮聖人にも金銭の価値を尊び、利益を追及することに一定の理解があったのではないかと述べており、その点が商工業者を中心とした町衆たちの信仰に繋がったとも推測される。

そして、そのように町衆から信仰を集めた日蓮宗は、やがて山門勢力からの攻撃に対抗するために寛正七年（一四六六）寛正の盟約を結び、諸門流や一致・勝劣派の拮抗が一時的に解決されることとなった。湯浅氏はこれを「各門流が結んだ大一揆」「武装集団のはじまり」であるとし、この時点を日蓮宗が「戦国仏教」化する端緒であるとする説がある、²⁵としている。

まさにこの京都の動乱の時期こそが、顕密仏教から戦国仏教へと変わる転換期でもあったのである。本稿のテーマである法華一揆、町衆に関する問題も、当時の日蓮宗の教義の拡大、そこからの戦国仏教の成立・展開といった視点から見るにより、新しい姿が見えてくるとも考えられる。

さらに別の課題として、河内将芳氏は近年、法華一揆を壊滅に追い込んだ相手側である延暦寺の実態が下坂守氏によつて解明され²⁶「今度は延暦寺の側から天文法華の乱や法華一揆を見ることが可能になった」²⁷として、重要な進展であり、この視点からの検討も活発化していくだろう、と述べている。

以上のように、まだまだ課題が山積している現状ではあるが、今後は新しい視点からの検討をふまえて、引き続き研究を進めていきたい。

《註》

- ① 林屋辰三郎「町衆の成立」(『中世文化の基調』)二〇二頁
- ② 林屋辰三郎著『町衆 京都における「市民」形成史』
- ③ 今谷明『戦国時代の貴族』三頁～四頁
- ④ 服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』
- ⑤ 大岩邦「転換期に於ける公家の交際圏について」(『日本女子大学紀要』一卷四号)
- ⑥ 今谷明『戦国時代の貴族』二八二頁～二八五頁
- ⑦ 同右 一〇七頁
- ⑧ 『現代宗教研究』第四四号
- ⑨ 天文六年(一五三七)正月、下京の町組の代表五名が將軍足利義晴のもとへ年頭の挨拶に出かけた際の費用の分担について評議した内容を記した史料。町組が初見される記録とされている。
- ⑩ 今谷明『戦国時代の貴族』二九六頁
- ⑪ 西尾和美「『町衆』論再検討の試み―天文法華一揆をめぐって―」(『日本史研究』二二九号) 六八頁
- ⑫ 同右 七二頁
- ⑬ 河内将芳『日蓮宗と戦国京都』一六〇頁
- ⑭ 『宣胤卿記』文明十三年三月廿六日條
- ⑮ 『昔日北華録卷中』
- ⑯ 今谷明『天文法華一揆 武装する町衆』七七～七八頁
- ⑰ 同右 二七八～二七九頁
- ⑱ 『現代宗教研究』第四四号
- ⑲ 冠賢「天文法難の一考察―京都町衆と諸国末寺信徒の動向―」(『京都町衆と法華信仰』)

- ⑳ 『後法興院記』明応五年（二四九六）閏二月八日～三月五日
- ㉑ 河内将芳 『日蓮宗と戦国京都』一〇七頁
- ㉒ 同右 一一三頁
- ㉓ 湯浅治久 『戦国仏教 中世社会と日蓮宗』一四九頁
- ㉔ 同右 同頁
- ㉕ 同右 一五二頁
- ㉖ 下坂守 『中世寺院社会の研究』
- ㉗ 河内将芳 「解説 事件史叙述へのこだわり」（今谷明 『天文法華一揆 武装する町衆』三四八頁）